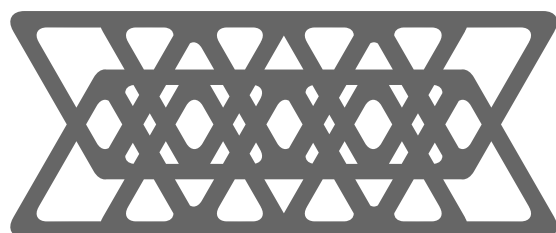
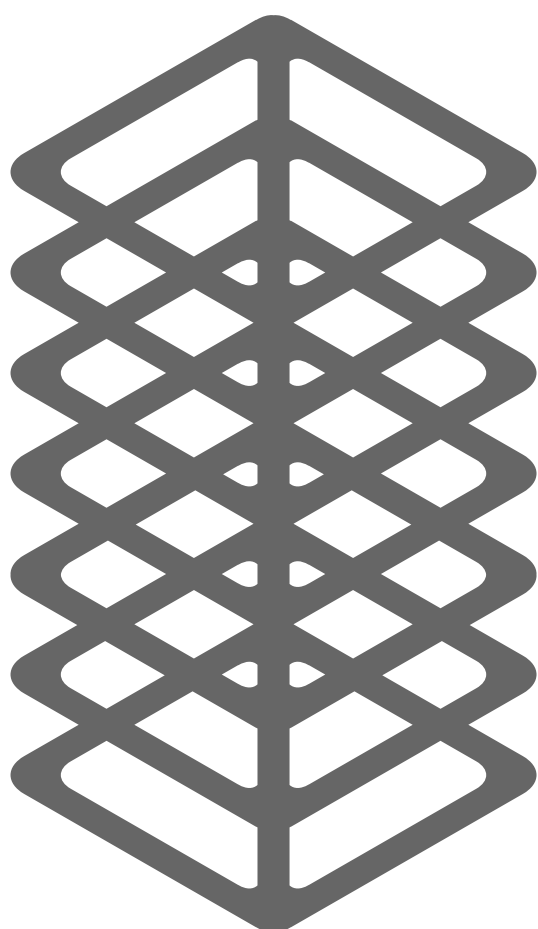


oddai

magazine

vol.9



■えいがのこと

『トラブソン狂騒曲～小さな村の大きなゴミ騒動』

トルコ北東部、黒海沿岸の小さな村のはなし。法解釈の柔軟性によって村のすぐそばに建設されたゴミ処理場を追った5年間のドキュメンタリー。事前の説明とは食い違う実態と無計画性により被害を受ける近隣住民。大雨で汚水が小川に溢れ出て、生活水は日々汚染され黒海に流れ込む。自分の青春も何もかもがここにあるからと言って村に残る者、外に出るより家の中にいる方がましと言って村を離れる。自分たち、ひいては祖先たちの代から選んできた偉い人たちが自分たちの生活を壊していく。同じようなことが今この国でも起きているのだと感じた。

今回は初めてネットでレンタルというものをしてみた。本当は別の作品を見ていたのだけど、途中まで見て何回か消してたら48時間のあいだは見れるはずなのにレンタル中のリストから消えてしまい、五百円も消えてしまいました。それで、知人からファティ・アキンの名前を聞いていたのでこの作品に『ソウルキッチン』の監督ということがわかりました。京橋のフィルムセンターでみた素晴らしい映画だったのでみました。



トラブソン狂騒曲～小さな村の大きなゴミ騒動～

12 ドイツ 監督：ファティ・アキン

■ある日の夢

杉浦俊介

塾に通っていたのがいつのまにか歯医者になって、銀歯取れてるとこ直したいって言っても出来ないとか言われる。磯野貴理子が来てなんか話す。歯医者出るとなぜか日野で、先生の車に乗り込む。明日チャリ取りにこないといけないのかと憂鬱に。夕方だったのはすぐ夜になって、向こうの方に立ち昇る雲が見えた。
「予報はズレて結局雨降らないですね」

みたいなこと言いながらふたりはいつの間にか車にのってなくて、川沿いの土手道を歩いている。

雲はテレビで見た火山雲のようで、よく見ると川の向こう岸の家が結構燃えている。ここを歩くのやばいんじゃないかと川を右手にいいそと歩いていると案の定大きな火玉(岩?)が左手の廃ホテルの窓を割って「わーっ」となった。



■ 128 段の階段のうた 4 段目 長谷川至洋

広場ではまだ雪が残っていた。3 日前に降ったものだ。遠い昔に思える。いまはもう春なのだから。僕は友達がいらないから、広場で待っている人はいない。見知らぬ人とあいさつを交わす。こんなに人はすると、何かまだ大丈夫だという気になる。ベンチに腰掛けてみようか。

■ 一行文学の世界

これは新しい試みです。俳句でも歌でも詩でもない、一行の言葉。それはとある架空の長編小説の中の一行だとします。たった一行が余韻を残し、波となり、あらぬ方へとつかの間イメージを広げたら素敵なおことです。

今日の一行
「彼はふと、高校生の時の夏の朝の通学の気分を思い出して、自分でも驚くほどに軽快になった」

■ それゆけ！なんでも計算隊 vol.2

やあ。なんでも計算隊のジャック・マキだよ。ちょっとひさしぶりだね。3ヶ月ぶりくらいかな。3ヶ月って、実感できるかい？計算してみよう。1ヶ月は30日として、1日は24時間、1時間は60分、1分は60秒だから、10分は600秒で、1時間は3600秒で、1日は86400秒で、1ヶ月は2572000秒。ということは3ヶ月は7716000秒だ。どうだい。長いような短いような、なんだかもうよくわからないだろう。それが時間というあいまいな尺度なんだ。



■おだいのわたし (8) 世界と身体と詩と 中村安伸

6月20日「ポエトリリーサーカスVol.5」と題したイベントにて、はじめて出演者としてブリュッケのステージ(?)に立つことになった。詩人の深澤紗織さんを中心とし、同じく詩人の半野可恵さん、音楽家の小野修さん、ダンサーのMegumi LinoさんとNamiさんというチームに、私も俳人として参加させていただいた。

当日の出演順にしたがって感想を記しておくと、まずは半野可恵さんの朗読、Namiさんのダンス、小野修さんの音楽という組み合わせ。半野さんの朗読を聴くのは二度目である。深みのある声が魅力であり、声を通してテキストそのものがしっかりと伝わるという点で、理想的なリーディングだと思い、感銘を受けた。

リハーサルから本番直前まで、半野さん、Namiさんのお二人が熱をこめて打ち合わせをされている様子が伺えたが、その過程で、ひとつのチームによるパフォーマンスというまとまりがどんどん強くなっていくのが傍目にも感じられた。Namiさんの動きはとても情熱的であり、半野さんのコントロールされた発声の内側にこめられた情念が、Namiさんのダンスに反映していたのかもしれない。

「らせん」という詩は、DNAの螺旋構造とダンスの回転運動を二重写しにし、生命の連続と身体の運動という二様の奇跡をない交ぜに語った、躍動感に満ちたテキストだった。ダンスと音楽とリーディングの三つが交錯しつつ一体となり、健康的な昂揚感が場に生じていた。

続いて小野さん、Megumiさん、私の順番となった。私は用意したテキストを読み、それにお二人が即興で合わせるという形式である。テキストは短い散文と俳句を織りまぜたもので、「詩と身体」というテーマが与えられたが、直接に身体を詠んだものを選んだのではなく、これまでの自分の作品のなかで愛着があるものを中心に選択した。俳句を作ること自体が身体と関わる行為であると思っっているからである。

私の方からお二人に何かをリクエストするということはほぼなかったと思う。それは、お二人が私のテキストをどのように解釈してくださるかということに関心があったからだ。私のリーディングと小野さんのピアノは相互に触発し、いわゆる「合奏」の喜びが生じていたと思うし、Megumiさんのダンスは、私からはほとんど見えなかったが、意志をもつ風が語りかけてくるように感じる事ができた。本番ではさすがにかなり緊張してしまったが、そのこと自体も面白く感じた。

そのあとにMegumiさん、Namiさんによるダンスのみのパートがあった。前半と後半でがらりと雰囲気が変わり、培われた身体表現のスキルの高さを堪能することができた。

最後は団長の深澤紗織さんによる三篇の詩の朗読である。

身体というテーマについて考えるとき、さまざまな切り口があるだろう。半野さんの「らせん」は身体の「運動」という点を主軸に置いていたが、一方で「感覚」もまた、重要な身体の機能であろう。

言語がなければ人は自分自身の身体の感覚のみによって世界に触れる。言語が生じることによって世界に触れた経験を他人と共有することができるようになる。だが、もちろん自分自身も、他の人間も世界の一部なのであって、言語以前に、他人の身体に触れる、触れ合うというコミュニケーションが存在している。皮膚あるいは粘膜を使い、他者と相互に感覚し、感覚される行為。一篇めの詩はそのようなテーマに強くフォーカスされたものと感じた。

身体の機能として「運動」と「感覚」を挙げたが、それらは完全に分離されたものではない。たとえば感じることによって動くことを「反射」と名付け、動くことによって感じることを「フィードバック」と呼ぶことができるだろう。

また、目的をもった運動を「動作」とするなら、動作は習慣化し日常のものとなっていくが、ダンスはそのような日常動作からの逸脱であり、快楽をとまなうフィードバックをもたらしものだろう。逸脱の

きつかけは内的な衝動であつたり、音楽など外的なものへの反射かもしれない。紗織さんの二篇めの詩からは、非日常の運動によつて覚醒させられる身体という主題を感じた。

さて、紗織さんが三篇めに読んだのは、もはや定番という感もある「世界は点滅するモザイク模様のように」であつた。この詩からは、多様で、変転する、雑然とした、気まぐれに明滅するカオスとしての世界と対峙するとき、たとえば神のような絶対者に解釈を預けて思考停止するのではなく、カオスそのままを一人の人間として引き受けてやろうという強い意志を感じる。

リハを含めてこの詩が読まれる場に何度も居合わせ、また文字となつたものを読みましたが、つねに新鮮な感動をおぼえるのは、世界が変転しているとともに、それを引き受ける紗織さん自身も変化し続けているからなのだろう。

世界も自らも変転しているからには未来に何が起きるかは予測不能である。その予測不可能性は不安や恐怖をもたらす。死への恐怖が未知への不安であるなら、生も死も未知であり本質的に異なるものではないという認識。それを受け入れることへの葛藤を経つつ最終的に「新しいショーがはじまる」という期待と昂揚に至る。そのかろやかさが深澤紗織という人のパワーや魅力につながっていると思つた。

この夜、この詩に添えられた小野修さんの演奏は、世界を縦貫し流れる河の水面に乱反射する日の光のように、また、その光を掬い取るスーラの点描の筆づかいのように、かろやかでかやかしいものだった。

この詩の後半に至つて、Megumiさん、Namiさんが揃つて登場し、それぞれ紗織さんの言葉によつて現前させられる世界を感受し、その波動に身体をゆだねているというふうに私の目には映つた。私自身もまた同じ波に揺られていたような気がする。

同じ演者が同じ詩をくりかえし読んだとしても、それはそのたびごとに新たな作品である。一期一会の緊張感みなぎる空間を、たしかに

感受することができた。私にとつてとても貴重な一夜となつた。

朗読に苦手意識をもつていた私に新しい扉を開いてくださった深澤紗織さん、素晴らしいパフォーマンスで刺激を与えてくださった半野可恵さん、Namiさん、そして、他人とひとつの作品を生み出すという刺激と喜びに満ちた経験をともにしてくださつたMegumi Linoさん、小野修さん、また、当日その場に居合わせてくださったすべてのみなさまに深く感謝いたします。

■足立区小台とはとくに関わりのない七月の俳句

美しき緑はしれり夏料理

俳句において「美し」という語を使うのは難しい。そう思つてしまふのは、美しいという語にすべてをまかせてしまひ、結果として陳腐になつてしまふという実作上の失敗を数多く経験し、また見てきたからだろう。

この句の場合「美しき」は「はしれり」という語と組み合わせられたことによつて生きている。

そういえば今まで、この句の「緑」がなにを指すのか、具体的に考えたことがなかった。この句が夏料理の美しさを詠んだものではなく、夏料理を前にして、そこに緑が「美し」「はし」っていると感じた作者自身の心を詠んだものだからであろう。

※作者は星野立子（1903年11月15日〜1984年3月3日）

■6月、7月とふた月にわたつて「あらくれ句会」をお休みしてしまいました。8月には復活する予定です。（中村安伸）

■荒川喫茶警々 喫茶あかね

小林孝圭

今も昔も、浅草寺の界限は休日ともなると物凄い人出で、積極的に足を運ぼうとは思わない場所ですが、少し中心部を外れたり裏通りに入ると、たちまち人ごみが消え、小さな個人商店や人気のない町工場が出現するのが、浅草の不思議なところですよ。

西側のロック座周辺は、今や場末には違いないのですが、どこかに昔日の華やかな面影が遺っています。それに比べると浅草東側、つまり花川戸や今戸のあたりは、どこか荒涼とした雰囲気が漂う街です。このあたりに来ると、休日さえほとんど観光客の姿は見かけなくなります。六区の呑み屋を探索するのも良いのですが、この東浅草から泪橋にかけての地帯を目的もなくほつき歩くのもなかなか趣があります。

さて、今回は東浅草の喫茶あかねを訪ねました。バス通りに面した印象的な赤い看板テント。いかにも純喫茶らしい木の扉を押して入る

と、外からの光が射し込む明るい雰囲気のお店です。純喫茶にありがちな重苦しさはまったくありません。此処の珈琲はサイフォンで淹れているそうで、メニューの後ろにはサイフォンの仕組みを解説したページがあります。とりあえず、珈琲が入るまでそれを読みましょう。店の奥には青年漫画や歴史小説がずらり並ぶ立派な本棚が鎮座ましています。肩肘張らない、居心地の良い下町らしい喫茶店でした。

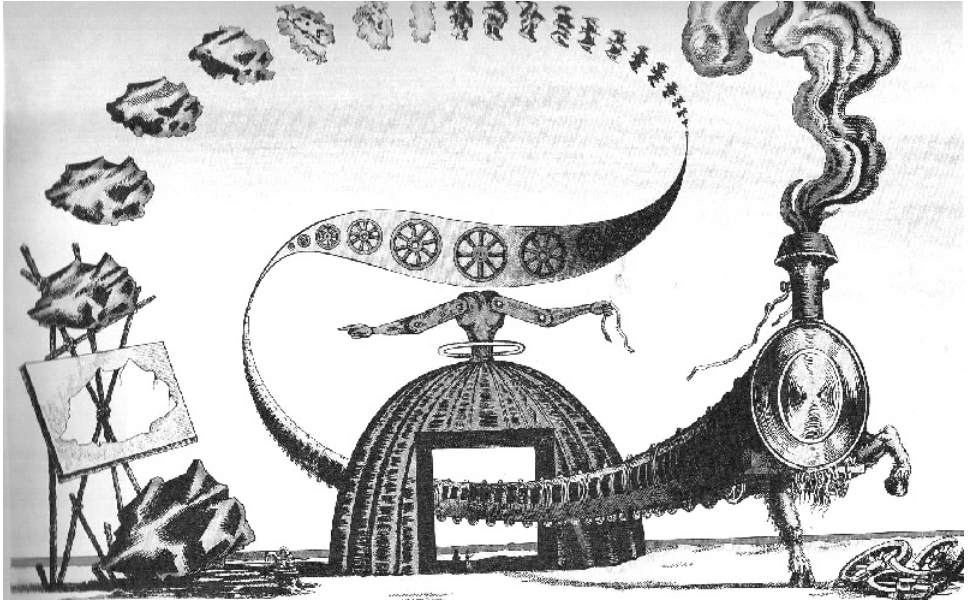
◆オーダー
コロンビア 470円

◆店舗データ
喫茶あかね

東京都台東区浅草7丁目6-5



NIGHTMARE PICTURES



ファビウス・フォン・グーゲル "Das Stahlroß "

今回ご紹介するのはドイツの画家グーゲルです。

いくらかサルバドール・ダリに似た幻想的な画風とも言えますが、より中世的な雰囲気漂わせた情景を得意としました。

ユーモアとキツェで覆われてはいますが、画の内部から不吉な神話が滲み出してくるように思います。

店主の手記

夏至を過ぎ、日に日に日が短くなっていますが、気温は上昇していくばかりです。先日、カメラを買い換えました。普段動画を撮っていたビデオカメラをミラーレス一眼にしました。それは単純にビデオカメラが店のまあまあ暗い環境に合わないという理由で、ある程度安く買えるものを選択しました。買ってから気付いたんですが、輸出の事情だかなんだかでビデオカメラとカメラの区別があるようで、このミラーレスでは動画を撮りっぱなしにすることができません。最高画質で15分くらいで一旦終わってしまいます。なので、撮影の時は確認しながら何度か録画ボタンを押さないといけません。それにしても、シャッタースピード、絞り、フォーカスまで全てマニュアル操作ができるカメラを手にとること自体がもの凄く久しぶりなんですが、これは普通に楽しいです。もう何年もiPhoneでしか写真を撮らない生活をしていましたが、少し、写真を撮るようになるかもしれません。

さて、盆踊りの季節です。近々かき氷を始めようと思っています。思っているといいつつすでに出せる状況にはあるので、食べたい方はこっそり注文してみてください。メニュー表をどうするかの方角性がようやく見えてきたので、それを作成中です。それができるとかき氷もメニューに載ります。店というのはなかなか大変なもので、1年半が過ぎてもまだここはこれでオーケーという部分が少ないです。イベントがあるので椅子やなんかはそれを考慮したものにしなないとと思うんですが、こうゆうのもやってみないとわからないというのものもあるし、後々これはやりたいからというので残さなきゃいけないとことの兼ね合いが難しいわけです。難しいというか、金があればすぐ買い揃えられるんだらうなとも思いますが、そこは貧乏なりに工夫してどう安く作るかとかを考えるのが楽しかったりはします。棚とテーブルと電気は早めに優先度高めですが、その他にも細かいものはたくさんあって落ち着くのはいつになることやら。

写真にしても、店作りにしても、それらをやる時間を作る場所からです。

店主

■ 店の予定

7/25 (土) 橋と音楽 vol.13

8/22 (土) 橋のピアノ #2

8/29 (土) 橋と音楽 vol.14

9/20 (土) 橋と音楽 vol.15

小台マガジン vol.9

2015年 7月 発行

編集・印刷

詳細、最新情報は HP でご確認ください。

<http://cafebrucke.org/>

BRÜCKE
U